

発展によりかなり改善出来るようになった。現在は糖尿病黄斑浮腫(DME)が一番の課題である。今回は、当科におけるステロイドによる治療成績を検討した。

【対象】当科にて2010年1月～12月、ステロイド(トリアムシノロンテノン嚢下注射)治療施行したDME 20例20眼。年齢 65±7.3, 男:女 6:14, 治療まで27±20(ヶ月), 経過観察22±12(ヶ月)

【方法】視力は対数視力で表示。OCT(optical coherence tomography; 光干渉断層計)はトプコン社3D-OCT2000を使用。網膜厚を測定した。合併症は、眼圧上昇(22mmHg以上)を検討した。

【結果】視力～改善5/不変13/悪化2, 網膜厚～改善14/不変4/悪化2, 合併症～眼圧上昇8眼(20眼中)

【結論】糖尿病黄斑浮腫の治療法として、ステロイド(トリアムシノロンテノン嚢下注射)は有用な手段である。

9 高用量メトホルミンが糖尿病患者の動脈硬化症危険因子に及ぼす影響の検討

植村 靖行・羽入 修・鈴木 浩史
古川 和郎・金子 正義・阿部 孝洋
石黒 創・大澤 妙子・小原 伸雅
森川 洋・伊藤 崇子・鈴木亜希子

新潟大学第一内科

【目的】メトホルミンは心血管イベントや死亡率を抑制するとされ、欧米では第一選択薬とされる。そこで今回日本人2型糖尿病患者の糖脂質関連指標に対し、高用量メトホルミン(HM)が与える影響について検討した。

【対象と方法】Hb-A1c 6.5%以上で、75歳以下・腎症3期までの34名(平均年齢58.1±12.2歳, 男性19名, 女性15名, BMI 27.6±3.9, Hb-A1c 8.2±1.6)を対象とし、HMに変更後の糖脂質関連指標を評価した。

【結果】Hb-A1cは3ヶ月で-1.04±1.04%, 6ヶ月で-1.41±1.44%と有意に低下した。体重, 血圧, LDL-cも有意に低下したが、乳酸の上昇は

無かった。

【結論】HMは日本人2型糖尿病においても有効で安全性も高いと考えられる。心血管イベントや死亡率抑制効果については今後の検討が必要である。

10 内因性インスリン分泌能を考慮したDPP-4阻害剤の使用経験

片桐 尚・五十嵐智雄・涌井 一郎

刈羽郡総合病院内科(糖尿病センター)

朝食前血中CPRおよびΔCPR(朝食後2時間CPR-朝食前血中CPR)を指標として簡易的に評価した内因性インスリン分泌能をもとに、糖尿病治療薬の使い分けを試み(2004.糖尿病学会)以後症例を積み重ねてきた。今回新たにDPP-4阻害剤の位置づけを試み、効果的な使用方法を検討した。DPP-4阻害剤の有効なケースとしてSU剤2次無効(SU剤+ピグアナイド剤が入っており)朝食前血中CPRが2ng/dl弱, ΔCPRが2ng/dl弱のような軽度の内因性インスリン分泌の抑制がかかっている症例にDPP-4阻害剤+ピグアナイド高用量を使用した。その結果 内因性インスリン分泌能の改善(ΔCPRの増加)が認められ、HbA1cの低下とともにSU剤, およびDPP-4阻害剤の減量が可能となった。一部には体重増加とともにHbA1cの再上昇が認められ、食事療法の順守がやはり大切と考えられた。

11 小児期発症1型糖尿病における発症早期の血糖コントロールとその後の推移

小川 洋平・菊池 透・佐藤 英利
長崎 啓祐・内山 聖・齋藤 昭彦
新潟小児糖尿病調査委員会

新潟大学医歯学総合病院小児科

【はじめに】1999年からコホート研究(新潟小児糖尿病コホート)を継続中である。対象者の血糖コントロールの推移を検討した。

【対象と方法】対象は、小児期発症1型糖尿病患者